

## は　じ　め　に

学校臨床総合教育研究センター長　汐　見　稔　幸

以下の6つの報告文書は、2002年12月7日に東京大学教育学部附属中等教育学校で行われた「『学力低下論』を超えて—これからの学力を育てる学校づくり—」と題した公開シンポジウムにおいて報告されたものをベースとしている。

本公開シンポは3年間にわたった学力問題プロジェクトの締めくくりのシンポジウムとして開催された。プロジェクトチームは、3年にわたって今日問題になっている学力問題の本質をより深く把握するために種々の議論と調査、研究を行ってきた。特に後半は、これまでのわが国における学力調査を吟味し、それらと関連を持たせた独自の学力調査を行うことに力を注いできた。そもそもプロジェクトの基本的なテーマは、今日の学力形成の正確な実態を把握し、学力の低下といわれている事柄が実際に起こっているのかどうか、起こっているとしたらどういう形で起こっているのか、そこに見られる特徴は何か、等々ということを明らかにすることであった。同時に、もし学力低下という現象が起こっているのであれば、それを克服するためにどうしたことがなされなければならないかということも研究するということを課題としていた。

残念ながら、後者の課題は十分プロジェクト

チームでは追求しきれず、市川教授が個人的にこのテーマで問題提起をしてきたのが実際であったが、本公開シンポでは、焦点をこの問題に移し、学力低下の事実指摘を繰り返すのではなく、低下といわれることの性格を考察しながら、それを学校レベルおよび行政レベルで克服していく可能性を探ることを課題とした。実は、2003年度からの本センターのプロジェクト研究は、この課題を引き継ぎ、学力形成への学校や行政の取り組みに対して、大学がどう協力・協同の関係を築きうるかということをテーマとしている。その意味で、本シンポは、学力問題プロジェクトから学校支援プロジェクトへの橋渡しの位置にあったということができる。

シンポのそうした性格ゆえに、このシンポの報告者は、共同研究者だけでなく、学校現場と行政の立場で学力形成の課題に取り組んでおられる方々に参加いただいて、そのエッセンスを話していただくという形をとった。ご協力いただいた方々には、この場を借りてもう一度お礼申し上げたい。そして今後とも、本センターとの協力・協同関係を維持して下さることをお願いしたいと思う。